

真構造道場

高橋 治 (東京理科大学)

連載 第103回

「追悼 近藤吉治さん」の巻



はじめに

2024年・令和6年1月、構造計画研究所の先輩であり、共に闘ってきた同志の近藤吉治さんが突然に逝ってしまった。能登半島地震の余震が続き、建築構造業界が自然の脅威に自分たちの無力感を感じていた最中のことであった。

近藤吉治さんとの最初の共闘プロジェクト

私が構造計画研究所に入社したのは1991年で、配属は地震動や地盤～建物連成解析を主とする、解析技術部であった。入社早々に常磐道で研究的に計測された車両振動（交通振動）のAD変換（磁気テープ→デジタルテープにデータ変換）を任せられた。並行して、地盤～建物連成解析ソフト「Super Flush/2D」で車両振動（交通振動）の解析把握のために、常磐道の解析モデル化を実施して加振解析を実施した。その後も「Super Flush/2D」の機能追加で、長周期地震動のRayleigh波やLove波をコーディングして組み込んだり、それを発展させて「Super Flush/3D」の開発に携わった。しかし、私自身の「構造設計部へ異動して構造設計をやりたい」という意識は強く、構造設計部に異動できないなら退職すると宣言していた頃に、先の常磐道の交通振動問題の発展形として、道路公団が外環道の上にRC団地（道路上建物）を建設する計画がスタートし、そのメンバーの一員に参画が許された。その時のプロジェクトリーダーは、当時の奥園敏文さん（構造設計部長）で、道路上建物の構造設計リーダーは、近藤吉治さん、私は主に地盤～トンネルカルバート～道路上建物の振動解析を担当した。なお、行政手続き上は時刻歴ルートでの構造設計となり、当時の日本建築センターのRC評定委員会での審査案件であった。当時、評定後は、打ち上げと称して朝まで飲み歩いていた。当然、奥園さんや近藤さんとの距離は近づき、より私自身は構造設計部への異動の気持ちが強くなっていた。当時の近藤さんは、ビル風やブロー成型の流体力学の部門から異動てきていて、「高橋なあ、構造設計部に来るなら28歳くらいまでに来ると良いよ。その後だと、いろいろ覚えることが多いし、大変だよ。遅いよ」と、アドバイスしてくれていた。

構造設計部でのプロジェクト

入社3年目で運良く構造設計部に異動した私は、近藤さんに鉄骨造の納まりやディテールを教わることが多かった。この頃の近藤さんは、長崎ハウステンボスのANAホテルの設計監理で現場常駐しており、たまたま、会社に帰ってくると、ファブリケーターからの鉄骨一般図や詳細図を承認

していた。その横で構造図のスケッチをし、CAD図をチェックしている私に先輩として教育してくれていた。

私が部長になった頃

構造設計が大好きで大酒呑みで、カラオケ好きで大きな口を開けて豪快に笑う近藤さんは、構造設計メンバーたちからは誤解を受けることも多く、イザコザもあった。20年位前であろうか。飲んだ次の日の朝、できる若手が「もう、近藤さんとはやれません」の剣幕でいた。その時私は、「構造設計部の将来を支える2人が揃めててもしょうがないだろ。構造が好きな2人で、将来の構造設計部を牽引してくれる2人だろ」と声をかけた。その若手が成長し、告別式で弔辞を読んでくれた。「あの時があってのことだな」個人的には本当に嬉しい。

私が会社を辞めた後

研究室の学生に、大事に卵から育てているオオクワガタを番いでくれたこともあった。鉄骨詳細図を描いては、自慢気に「良さがわかるのは高橋さんだけですよ」と送ってくれた。

おわりに

近藤吉治さん、本当に感謝です。あなたは、立派なエンジニアでした。この綴りが、近藤さんの家族や同僚、後輩にも届くと良いな、と思います。

